

## 中唐詩人の白話詩に現われた語彙

『長田夏樹論述集（上）』第12章  
（原載：『中国語学』第52号，1956年7月）

唐代の白話詩として一般的にイメージされるのは、王梵志や寒山らの作品に見られる、仏理を平易な言葉で説いた教訓詩の世界であるが（項楚等『唐代白話詩派研究』巴蜀書社、2005等を参照）、本論文が扱うのは李白（699-762）、杜甫（713-771）の没後より韓愈（768-824）、白居易（772-846）の活躍した時代に至る、中唐の白話詩である。

著者は「まえがき」において、唐代語法の資料としては敦煌文献が最も優れているが、そこには①文章スタイルの差異、②韻律の制約、③時代の差異、④方言の差異、⑤作者の文学的立場によって種々の言語相が現れ得るとし、その資料年代学的な尺度を求めるためには、唐詩の語彙を時代別に体系的に配列することが必要になるという。その足掛かりとするため、著者は白居易がなした「閑適」、「諷諭」、「感傷」三派の分類に、民謡的詞曲の形式を善くした「歌行」の一派を加え、このうち「諷諭」・「歌行」の二派に属する詩人たちが白話的な詩を書き残したとして、王建、戴叔倫、戎昱、皎然、秦系、張祜、顧況らの詩を取り上げて、その語彙を分類・配列している。

本論文で用いられる品詞分類は以下の通り（カッコ内は現在一般的に用いられる名称）：  
1. 助動詞、2. 補助動詞（補語）、3. 代名詞（人称代詞）、4. 指示代詞、5. 量詞、6. 副詞、7. 副動詞（前置詞）、8. 接続詞（接続詞）。多くはそれぞれの品詞を更に分類し、その用例を挙げるだけの簡略な書きぶりであるが、その分類は粗すぎず細かすぎず、まさに尺度となすに適したものと言える。未完に終わることが多い著者の品詞分類の全体像が示されている唯一の論文という意味でも貴重である。

特定の詩人の語彙使用について調べるか、さもなければ『全唐詩』の電子版を検索して傾向をつかむのが当たり前のようになっている昨今にあつて、歴大な作品群の中から白話的な詩を残した詩人を峻別し、そこから語彙語法史にとって有用な資料を取りだそうとする著者の態度は着実であり、また、特に作者の文学的立場からその口語性にアプローチしようとしたのは、著者ならではのユニークな着想と言える。初唐・晩唐の詩についても、同様の構想に基づく研究が行われてしかるべきであろう。

なお、著者が最も愛したとおぼしい中唐の詩人王建については、『論述集（上）』の第10・11章に専論がある他、著者自身による詩の訳稿もある（「王建詩訳抄」『光沢』第1号，1960；『自分の眼で』第1号，1964）ので、合わせて参照されたい。（竹越孝）